

古墳時代

古墳時代後期の竪穴建物跡が数棟と溝跡などがみつかり、集落が営まれていたものと考えられます。

古代

奈良時代から平安時代の建物跡が見つかっています。これら建物跡の中にはコの字形の配置をし、方位を揃えているなど企画性の高いものがみられます。

この地域は古くから田村荘とよばれる^{しょうえん}荘園であったことが知られています。また、遺跡の所在する香長平野は古代の条里地割を^{じょうりちわり}継承しているのではないかと考えられています。調査で見つかった建物群もこの地割に合わせて建てられており、役所あるいは荘園に関連した施設があったものと思われま



企画性の高い建物跡

中世

遺跡の北東には土佐の守護代細川氏の居館と伝えられる田村城跡^{じょうせき}があり、調査により城を囲む堀などが確認されています。城跡の南側では一辺が20~50mの溝で方形に区画された^{やしきち}屋敷地が複数見つかりました。屋敷地では母屋^{おもや}と考えられる建物とそれに付属する納屋^{ふそく}的な建物や井戸跡^{いど}が確認され、当時の住まいの様子がうかがえます。

これらの屋敷群は、細川氏が入国以前の14世紀から細川氏が活躍した15世紀、そして16世紀代に盛行したものと大きく3時期と考えられます。



溝に囲まれた中世の屋敷跡

主催 / 高知県立埋蔵文化財センター（公益財団法人 高知県文化財団）

協力 / 高知県

後援 / NHK 高知放送局 高知新聞社 RKC 高知放送 KUTV テレビ高知 KSS さんさんテレビ

印刷 / 川北印刷株式会社

令和6年度高知県立埋蔵文化財センター企画展「高知の遺跡展—田村遺跡群—」

開催期間 / 令和6年4月28日~7月7日（休館日・土曜日）

令和6年度高知県立埋蔵文化財センター企画展 I

高知の遺跡展

—田村遺跡群—

^{たむら}田村遺跡群は南国市田村に所在します。高知県中央部に広がる高知平野の東側、物部川によって形成された香長平野の物部川右岸に立地しています。これまで、高知空港の滑走路拡張（第1次・第2次）や高知南^{じょうもん}国道路建設（第3次）による大規模な発掘調査が行われ、縄文時代から近世の^{いごう}遺構や^{いぶつ}遺物が確認されました。特に弥生時代では多数の遺構や遺物などが見つかり、高知県の弥生文化を考えるうえで重要な遺跡であることが判明しました。今回の展示では弥生時代を中心に縄文時代・古代・中世における遺跡の様相を紹介します。



上空からみた高知龍馬空港と田村遺跡群

遺跡範囲

縄文時代

県内の縄文時代の遺跡は高知県西部の四万十川流域^{れいほく}や嶺北地域の吉野川流域などの山間部に多く、平野部において縄文時代の遺物がまとまって発見されたのは田村遺跡群が初めてとなります。縄文時代後期の土器や石器が多く見つかり、土器では九州との関連が深い鐘崎式^{かねざき}土器が多く出土し、注目されています。



縄文土器の出土した様子

弥生時代

発掘調査で見つかった竪穴建物跡は約500棟、掘立柱建物跡は約300棟、土坑は約2,800基を数えます。弥生時代前期初頭から集落が営まははじめ、中期末から後期初頭には大規模集落へと発展していきました。

前期

1. 最初のムラ

第1次の調査において弥生時代前期の最初のムラが発見されました。ムラは竪穴建物跡10棟、掘立柱建物跡15棟で構成されており、竪穴建物跡のなかには中央土坑の両脇に小さな穴を伴う特徴をもった松菊里型住居がみられます。最初のムラの存在は田村遺跡群で初めて明らかとなりました。



田村遺跡群で検出された松菊里型住居跡

2. 環濠集落へ

最初のムラから400mほど北方に中心が移り、溝で囲まれた環濠集落が営まれます。集落の東側には大きな流路があり、環濠はこの流路につながっていたと考えられます。環濠は3条あり、内側と外側には多数の土坑が確認されましたが、竪穴建物跡などの住居跡は環濠の外側でしか見つからないこともこの集落の特徴の1つです。



外濠の断面



内濠から土器が出土した様子

その後、前期末になると環濠は埋まり、離れた場所で小規模なムラが営まれたと考えられています。

発掘された水田跡

1次調査では弥生時代前期の水田跡が244枚見つかりました。畦畔によって区切られ、畦畔間は2~5mほどの間隔で、その形状は正方形ないし長方形をしています。用排水がうまくできるように微高地縁辺から低湿地にかけての緩やかな傾斜を利用して作られています。



見つけた水田跡と足跡

中期から後期

3. 大規模集落へ

中期後半から後期初頭にかけて遺跡が最も盛行する時期です。約300棟ほどの竪穴建物跡が見つっています。竪穴建物跡のなかには直径が8m以上の大型の住居もみられます。また、多量の土器とともに青銅器や鉄器などの金属器、ガラス小玉など装飾品も出土しています。この時期は遺跡数も増え、周辺部では下ノ坪遺跡や本村遺跡、西野々遺跡などで集落が営まれます。



中期から後期の集落跡

4. 集落の終焉へ

その後、後期中葉以降には遺構・遺物ともに激減していきます。弥生時代の初めから後期前半まで続いた田村遺跡群は終焉を迎えます。



どうぼこ
銅矛



まがたま
ガラス小玉と勾玉



弥生時代前期の土器

前期の土器

弥生時代前期は遠賀川式土器が使用されています。西日本を中心に広範囲に分布した土器で、田村遺跡群では壺や甕が多く出土しています。壺は貯蔵用、甕は煮沸用と考えられています。その後、弥生時代前期末ごろから地域色の強い土器(南四国型甕)に変化していきます。



弥生時代中期から後期の土器

中期から後期の土器

中期後半以降になると地域色の強い土器の他に瀬戸内地域の影響を受けた凹線文土器が作られています。また、高松平野や南九州から搬入された土器も出土しています。土器の形態もバラエティー豊かになります。